

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

沖縄県国頭村辺野喜方言の助詞

著者	野原 三義
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	8
ページ	7-30
発行年	1983-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/12057

沖縄県国頭村辺野喜方言の助詞

野 原 三 義

辺野喜（方言名 ?uniki）は沖縄本島最北端の国頭村にある村落である。役場のある辺土名と最北端の辺戸岬の中間あたりに位置しており、東支那海に面した静かな村である。辺戸岬からは奄美の与論は目前だし、沖永良部の島影も見やることが出来る。

辺野喜方言で田のことを sa: といったり、我のことを gwa: といったりする特徴的な対応関係は以前から承知していたが、まとまって観察したのは1980年の2月と8月である。この方言を教えていただいた方がたは宮城伸正（1898年生）、宮城定郁（1907年生）、宮城定盛（1911年生）、山城マカ（1900年生）、東恩納ゴゼイ（1904年生）、金城ギラ（1905年生）、宮城カマト（1906年生）さんの7名である。

以下の記述は格助詞、係助詞、副助詞、終助詞等を中心として行う。

I, 格助詞

I, l, ga

(a), 主格に立つ場合

?amma:ga ?iru:nri ?i:tanro:

母さんが 行って来いと 言ってたよ

?umme:ga ?i?kagi:θ

じいさんが 召し上がる

?uraga ?i:sija makabi

お前が 言うのは うそ

φurija mutfikahanu wagaja najaθ

それは 難しくて 私がは 出来ない

taro:ga sufija ?itiθ wassa:nu

太郎がするのは いつも 悪い

fi:jo: je:munna:

仕様 だな

?aθgutū taka:numuθ ho:ifiga

あんなに 高いのに 買うのが

φuitfina

いたか

?uφiha:figa satto:taθ

大きいのが 立っていた(人など)

?uφiha:figa nato:taθ

大きいのが なっていた(果物など)

(b), 連体格の場合

?ariga ?ujaja φune:raka:

あれが 親は この間から

jaro:taθ

病気だった

mitaiga ?utfika: saruganaga

三人が 内から 誰かが 取って

sutente:

あるよ

ju:tfiga mi:ja ?ainte:

四つが 一杯は あるだろうよ

ti:tiga ?uttu fi:ra: jente

一歳が 弟 兄 であるよ

(ちがいの兄弟)

次はくたったそれだけの」というような意の

所で用いられる。

çakujega muga ho:ti ho:tanri
 百円が 物 買って 買ったと
 似たような語句に挟まって用いられる。これも強調の意の所で使われる。

me:ga me:niti
 毎が 毎日(毎日ということの強調)

(c), 動作の目的

?afibi:ga ?ikuga 遊びに 行く

midgi kumi:ga ?ikanna:

水 吸みに 行かないか

øarugati jamuga øuiga ?ikuga

畑へ 甘藷 堀りに 行く

次のような場合は ga を介さずに連体修飾が成立する。

gwa: muga <わたし(の)物>, gwa:
 fimuti <わたし(の)書物>, gwanna:
 ja: <私たち(の)家>, ?ura gusani
 <お前(の)杖>, ただし、三人称の ?ari
 <彼、彼女>の場合は ?ariga muga <あれ
 が物>, ?ariga kiga <あれが着物>という
 ように ga が現れる。

共通語の目的を表す<ヲ>に当たる助詞は、
 次のように見あたらない。これは沖縄方言に共
 通する特徴である。

dzi: haku <字(を)書く>, me:fi
 t*fi*kuga <箸(を)作る>, saki numuga
 <酒(を)飲む>, øa:me: sume:iga <妻
 (を)めとる>(昔の言葉)
 gwan t*fi*ra mi: mi: sutaga
 私(の)顔(を)見い 見い していた

I, 2, nu

A, 連体修飾

(a), 所有・所属

çi:nu øa: 木の 葉

sataminu suba 畳の 側

øainu mi: 針の 孔

nabinu suku 鍋の 底

øafi:nu saga 柱の 棧

øi:nu naha 火の 中

ja:nu ?ussu 家の 後

fi:sunainu ?umme: 隣の おじいさん

me:nu mi:tumba 前の 夫婦

t*fi*kahanu tu: 近くの 人

su:hanu tu: 遠くの 人

naba:nu ?uja ナバーの 親
 (男の童名)

kana:nu k'wa: カナーの 子
 (男の童名)

gira:nu sari ギラーの手拭
 (女の童名)

gwa:nu muga kwa:fe:

豚の 物 食わせよ

(b), 状態

kutinu mi: 口の いっぱい

?uinu tu: 上の 人

jue:nu ha:ri 祝の 数(たびごと)

(c), <～という>ほどの意

?iøanu fima 伊平屋の 島

(d), 情感的な物の対象を示す

kinu:nu ne:nu ?uturuha:tafi jo:

昨日の 地震の 恐ろしかったことよ

na:

ね

kumidzimanu jamunnu ma:hatafi

久米島の いもの おいしかった

jo: na:

ことよ

(e), nu の前後の単語の内容が同じ

gwa: ʔujanu hanro:ga saʔ

私 (の) 親の ハンローが した

ʔe:ru:nu gira:ga ʔi:taʔ

友達の ギラーが 言った

(f), < ~の後は >

nu:imunu ʔatuja so:gi suʔ

縫いものの 後は 掃除 する

saki nudinu ʔatuja ʔo:imunro:-

酒 飲んでの 後は 喧嘩ぞ

ru sutaru

している

(g), < ~の家の (者) > の意を表す

ʔagarinu sannaʔ アガリの 三男

(屋号)

ʔarija mijaginu ʔajaʔka:ja:

あれは 宮城の ではないかね

ʔamanu gwarabi je:ka:ja:

むこうの 子供 であるかな

(h), 時に関する語について < ~の時の >
という意を表す

ʔikutinu kwa:ga いくつの (時の) 子か

nidʒu:nu kwa: 20歳の (時の) 子

(i), 地名やそれを尋ねる語について出身
を表す。 < ~の出身の > 意。

ʔanu tu:ja ra:nu tu:gaja

あの 人は 何処の (出身の) 人かね

ʔukunu tu: jenri ʔi:banna

奥の (出身の) 人 であると 言うよ

ʔirunu tu: 辺戸の (出身の) 人

(j), < ~と同じくらいの > ほどの意

sainu sahasanu ja:nu ʔunto: ʔaiʔ

丈の 高くて 家の くらい ある

B, 連用修飾

主語や対象を示す。共通語の < ガ > に当たる。

ʔi:nu raruhanu 手が だるくって

habunu ʔuiʔ ハブが いる

munnu ni:ruʔ 物が 煮える

kusanu muiʔto:ʔ 草が 生えている

ʔatunu sura:kussa:

鳩が 飛んで歩くよ

(いる)

ʔa:nu jari kurahajaʔ

歯が 痛くて 暮らされない

jakubani suri:nu ʔaiʔ

役場に 集まりが ある

tʃa:nu hataha:ʔ 茶が 堅い (濃い)

san } nu takaha:ʔ 山が 高い
jama }

matʃijanu kʷa:nu ʔisa utanri

店の 子が 足 折ったと

ʔinnukwa nuʔ ware:nna

犬 がも 笑うか

ʔunagunutu nainumuʔ ʔuʔganu

女 がさえ 出来るのに 男が

najanunriʔ ʔainna

出来ないとして あるか

次は < ~のくせに > ほどの意

warabinu ʔanafi kika kika sunna

子供が 話 聞か 聞か するか
(きこうと)

次のように nu が n に弱まることある

sufin juru 歳の夜 (大晦日)

次は格助詞 nu が省略される例。

gwata jamuθ 腹 (が) 痛い
 tʃiburu jari juφuto:θ
 頭 (が) 痛くて 休んでいる

l, 3, ni

(a), 物事の存在する場所

gamani ʃima:to:θ 洞穴に 住んでいる
 ʔamani wa:nu uissa:
 むこうに 豚が いるよ
 φaruni ʔo:φa tʃikute:θ
 畑に 野菜 植えてある
 naguni ʔaitanu hanafi
 名護に あった 話
 φumani bi:ba そこに坐れ
 φumani φuiθ ここに いる
 φumani ʔainro: ここに あるよ
 ja:ni φuinro: 家に いるよ
 ra:nin ne:θkutu 何処にも 無いこと

(b), 物事の状態

mitʃini nitto:θ 道に 寝ている

(c), 動作の目的

jamatuni ʔikuθ ヤマトへ 行く
 naφani ʔiraθ 那覇に 行った
 hamani ʔaʃibi:ga ʔika
 浜に 遊びに 行こう

(d), 到着点

ʔugimi kidzukani ʔiraθ
 大宜村 喜如嘉に 行った

(e), 動作・作用の向けられる対象

ʔurani juʃi:θ お前に 教える
 warabiniθ wahaiθgutū juʃi:ba

子供にも 分かるように 教えろ

tʃu:ni sa:taθ 人に やった
 mi:ni mimbe:nu ʔidʒito:θ
 目に ものもらいが 出ている

φe:ku φuiʃini sa:suθ

早く 来るのに とらす

ʒinni nuiθ 船に 乗る

(f), 動作主を示す

ʔumme:ni nura:ttaθ
 じいさんに 怒られた
 ʔujani sugujattaθ 親に 怒られた
 ʔinnukwani ku:jattaθ 犬に かまれた

(g), 比較の基準

φunu kwa:ja ʔujani nito:θ
 この 子は 親に 似ている
 wanna: ja:ja gakkō:ni tʃikahaθ
 私達の 家は 学校に 近い

(h), 方法

mi:tʃini waki:θ 三つに 分ける

(i), 物事の行われる時・場合

mitʃikinija naiθ 三つきでは 出来る
 mitʃikinija nairu suru
 三つきでは なりぞ する
 rokudʒini ʔuφitaθ 六時に 起きた
 gunahanu ba:ni sugujattaθ
 小さい 時に 殴られた
 nitto:nu ba:ni ʔidʒi φa:nsa:
 寝ている 時に 行って居ないよ
 ʔakitinu saθgwaʃini ni:biki suθ
 明けての 三月に 結婚 する
 jue:nija nu: kiti ʔikuga

祝には 何 着て 行くか
 ?amani ?inritʃi ja:ni he:taŋ
 雨に 濡れて 家に 帰った
 ʃitʃigwatsu so:gwatsuni ja:gati
 盆 正月には 家に
 he:tu:jo:
 帰ってこいよ

(j), 動作・作用の目的

ʃigutuni ?iraŋ 仕事に 行った

(k), 並列

suini ?aʃiru 鶏に あひる
 naŋkwani ʃibuini re:kuni
 南瓜に 冬瓜に 大根
 ?amaniŋ ʃumaniŋ ?ikassaŋ ?aiŋ
 あちらにも こちらにも 沢山ある

l, 4, gati, gatʃi

動作の目標

ʃarugati jamuŋ ʃuiga ?ikuŋ
 畑へ いも 堀りに 行く
 ʃintunagatinri ?itai nagugatinri
 辺土名 へと 言った 名護へと

?itai

言ったり

?amagati ?ifi nagi:ŋ
 むこうへ 石 投げる
 ʃintunagatiru ?ikuru
 辺土名 へぞ 行く
 da:gati ?ikuŋga どこへ 行くか
 ra:gati ?ikuga " "

格助詞「に」「へ」に当たるものを調べるさい、北部方言ではチ系やカチ系の現れることが多いが、辺野喜方言では ni の方が優勢で、

カチ系は上記文例の 2 番 3 番のみであった。残りの例は、他の助詞を調べるさいに現れたものである。gati と gatʃi の関係は、前者の方が古いであろう。ちなみに、辺野喜の北隣の宇嘉部落では naʃa gati ?ikaja: 〈那覇に行こうね〉と gati を用い、南隣の佐手では ʃintuna gatʃi ?ikiŋ 〈辺土名に行く〉のように gatʃi を用いる。謝敷の方も gatʃi を用いる。

l, 5, ka:, kara

(a), 空間、時間の出発点

?amaka: ʃuiʃija saruga
 むこうから来るのは 誰か
 ʃitʃimitʃika: jo:ne:ga:reŋ hata-
 朝から 晩までも 働
 raku

く

ʃitʃimitʃika: ?abi ja:suŋ
 朝っぱらから わめいている
 ?atu ka: ʃuigutu saki nato:ke:
 後から 来るから 先 になっておけ
 tusui natika: nu: naiŋga
 年寄 ってから 何 出来るか

(b), 物事の順序の始め

ʃiʃika: kwe:ŋ 肉から 食べる
 sato:ʃika: suti sa:ʃe:
 咲いてるのから 取ってくれ
 ?awatʃito:ʃiŋ ja: ?idʒikara ʃu:
 慌てていても 家 行ってから 来い

(c), 原料、材料。〈～で〉の意

sato:ja ?ugi ka: ʃukuiŋ
 砂糖は 甘蔗で 作る

(d), 手段, 方法。〈～を利用して〉の意

jamatunija nu:ka: ?iku0ga

ヤマトへは 何から 行くか

ci0kara ?iku0 船から 行く

jambarubunika: samum mutfitta0

山原船から 薪 持って来た

(e), 動作が行われていることの確認

pa:pa:ja matfika: ?atta:kuta0

ばあさんは 市から 歩いていた

?umme:ja amaka: ?atta:kuta0

じいさんは 浜から 歩いていた

(f), 〈～の部分から〉の意

fi:fi:ja ?anranu ?aito:maka: ho:-

肉は 油の ある所から 買っ

tu:(ba)

てこい

l, 5, fi

(a), 手段, 材料, 行為者など

jubiguifi wahata0 呼び声で 分かった

jubiguifiru wahataru

呼び声でぞ 分かった

mugigu:fi timpura ?agite:0

小麦粉で てんぷら あげてある

rakifi me:fi tfikute:0

竹で 箸 作ってある

sakija umifi tfikui0

酒は 米で 作る

?urafi tfu:i so:ke:

お前で 注意 しておけ

purifi kaku0 筆で 書く

(b), 期限, 限度, 範囲などを表す

0unu ja:ja tfufikifi tfikutanri

この 家は 1 か月で 作ったと

gunitfifi ja naihanni

5 日では できるだろう

gunitfifi ja nairu suru

5 日では できぞ する

(c), 動作の行われる場合の状態

murufi ?o:tfitta0 皆で 喧嘩してきた

wahamununsa:ga murufi ?uruto:0

若者たちが 皆で 踊っている

(d), 並列的

?arifi0 purifi0ja naja0

あれでも これでもは 出来ない

l, 6, jo:ka(:)

(a), 比較の基準

taru:jo:ka dziru:garu so: itto:-

太郎より 次郎がぞ しっかりし

0gutu ?aissa:

ているようだ

fi:fi:jo:ka ju:nu sahasa0

肉より 魚が 高い

purijo:ka ?arija puruha0

これより あれは 古い

0ujujo:ka natfinu mafi

冬より 夏が まし

?innukwajo:ka: maja: mafi

犬より 猫 まし

ho:ifi:jo:ka ru:fi tfikure:

買うのより 自分で 作れ

(b), 否定の語句と呼応し, それ以外にないことを示す。

ja:jo:ka fukanija fujaθ
お前より 外には いない
?arijo:ka ?uφiha afija fujaθ ha-
あれより 大きいのは いないだ

nni

ろう

waθjo:ka fukanija naifija fujaθ
私より 外には 出来るのは 居ない

hani

だろう

l, 7, tu

(a), 相手, 共同者

taru:tu ni:biki saθ
太郎と 結婚 した

džiru:tu ?o:je: saθ
次郎と 喧嘩 した

rufitu ?iraθ 友達と 行った

ja:tuja najaθ お前とは 出来ない

(b), 比較の対象

mukafitu namaja tfiga:to:θ
昔と 今は 違っている

?itfinimme:nu kufini warabitu
一人前のくせに 童と喧嘩して

?o:tjitanrissa:

来たそうだ

(c), 並列

tji:satjimantu:tu ?asasa:

かまきりと せみ

nabitu φagama 鍋と 釜

?uθgatu ?unagunu φuiθ

男と 女が いる

φunitu ha: nato:ssa:

骨と 皮 なっているよ

fifitu ju:tuja džiruga mafe:ga
肉と 魚とは どれが ましか

čitfimitji kwe:fitu jo:ne: kwe:-
朝 食うのと 夜 食うのと

fitu džiruga mafe:ga

どちらが ましか

(d), 形容詞の反復形について副詞句を作る。

he:be:tu φu:jo: ^{はやばや} 早々と 来いよ

hatagata:tu ?i:re: ^{かたがた} 濃濃と 入れろ

jaφajaφa:tu ni:ba ^{やわやわ} 柔柔と 煮ろ

?uφi?uφi:tu ^{おおおお} 大大と

hataha:θ <濃い>, jaφarahaθ <柔らかい>, ?uφiha:θ <大きい>

l, 8, no:ti, na:ti

動作・作用の行われる場所

mitfino:ti ?ika:taθ 道で 会った

ha:no:ti ?uiraθ 川で 泳いだ

?amano:ti 向うで ja:no:ti 家で

?amana:ti ?afibumi 向うで 遊ぶか

この助詞は、格助詞 ni <に> と動詞φuiθ <居る>の結合に由来するものかもしれない。

l, 9, ja <並列>

matfija garimannu muiθ

松や ガジマルが 生えている

II, 係助詞

II, 1, ga <疑問>

(a), 疑問語との呼応

(a)-1, 疑問語に直接つく場合

?ikutfiga <いくつか>, kassaga <いくらか>, ta:ga <誰か>, tsa:ga <どう

か〉, diruga 〈どれか〉, nu:ga 〈何か〉

(a) - 2, 疑問語の次に助詞, 動詞の準連体形・終止形, 形容詞の終止形, 名詞等が介して呼応する場合

?itʃika: ga 〈いつからか〉, da: nuga 〈どこのか〉, da: ka: ga 〈どこからか〉, da: gatʃiga 〈どこへか〉, kassabe: ?a-iga 〈いくらぐらいあるか〉, ta: ʃi suga 〈どのようにするか〉, tʃa: suga 〈どうするか〉

nuga warabi nake: suga

なぜ 子供 泣かすか

da: gatʃi ?ikuga どこへ 行くか

ka: suga どう するか

samug gwati ?atuja nu: suga

薪 割って 後は 何 するか

saga surahaga 誰が きれいか

diruga ?ura muga どれが お前のか

(b), 係結び

sagaga surahara wahajag

誰かが 美しいか 分からない

典型的な係の ga に対する結びとしての活用語 -ra 形は得られなかったが, 上記の例からして係助詞 ga の係結法は確認されたといつてよい。

II, 2, ru 〈ぞ。強調〉

(a), 係結び

名詞や活用語, 助詞に結合し, 活用語の -ru 形と呼応する。

da: ru hakuru 字ぞ 書く

ʃa: ru kuwa: ru いもぞ 食っている

tʃa: ru nu: ru 茶ぞ 飲んでいる

ʃi: haru ?a: ru 寒さぞ である

tʃi: firu ʃa: ru, ʃi: fija ?a: ga

使うのぞである 捨てるのは あらぬ

?o: imuno: ru su: taru 喧嘩ぞ していた

" su: ru " している

?u: ragaru ʃe: ru お前がぞ してある

ʃu: gutu wassa: fija ?a: rigaru ʃe: ru

こんなに 悪いのは 'あれがぞ してある

?a: rigaru su: raha: ru あれがぞ 美しい

ku: sanuru mu: ito: ru 草のぞ 生えている

ʃi: tunagatiru ?i: kuru

辺土名へぞ 行く

(b), 係結び以外の陳述との呼応

?a: ʃi: riru ?u: i: ri: 遊んでぞ いるか

wa: muno: je: ka: ja:

私の 物ぞ であるかな

ta: ro: ru je: ta: ka: ja:

太郎ぞ であったかな

II, 3, ja 〈は〉

(a) - 1, 主題を表す

?u: gija ?a: mahag きびは 甘い

ta: kija ta: kahag 丈は 高い

ʃu: rija wa: mug これは 私の物

?a: mija ʃu: jag 雨は 降らない

?u: raja sa: rati ?i: ke:

お前は 先だって 行け

ʃi: gutuja su: gu ?u: watag

仕事は すぐ 終った

ti: mura: ja ?a: gi: ʃi: re: ku: wa: ti

てんぶらは あげ次第 食べて

ne: g

ない

?u: nu ?i: nukuwaja so: ?i: ti tunu

この犬はしっかりして 人の言う

ʔi:ʃi nu:θ kikuθ

ことを 何でも 聞く

(a) - 2, 対比的な文の中で両方の主題を表す。

ʃiruja ʔatʃihaʃiga, juruja ʃirahaθ

昼は 暑いが 夜は 涼しい

na:be:raja ma:haʃiga, go:ja:ja

糸瓜は 美味だが 苦瓜は

ʔiθgahaθ

苦い

(b), 卑しめる語について卑しめの意を表す。かなり終助詞である。

jana warabija, naka naka ɸujaθ

悪い 子供は, なかなか 来ない

(c), ~jo:ka ~ja mafi <~よりは~はよい>, -gutu ~ja mafi <~だから~はよい>という構文で用いられ, 後者がよいことを言う。

matʃija ʔiri ho:ifijo:ka tʃukuiʃija

店 行って 買うのより 作るのは

mafi

まし

ɸi:dʒa:ja kusahagutu wa:ja mafi-

山羊は 臭いから 豚は まし

ja:

だね

ɸaibaja ʔutaigutu junna: ʔakkufe:

走ると 疲れるから ゆっくり歩くのは

mafi

まし

次のような ~ja mafi <~はよい>という

構文でも, 前のものよりは良いことをいう。

kwe:ʃija mafi 食うのは よい
(方が)

nimbuʃija mafi 寝るのは よい
(方が)

(d), 詳述

naguja ra:ga 名護は どころか

この文は, 名護市のより詳しい場所を聞いて
いるのである。

(e), 文末に否定の語を伴って<~では>
の意を表す。

taro:ja ʔajanna 太郎は あらぬか
(ではないか)

suθja ʔajanna 損は あらぬか
(ではないか)

(f), 疑問語につく場合

da:ja ɸintunaja 何処は 辺土名か

(g), 格助詞 ga, nuにつく場合

ʔuragaja najaθ お前がは 出来ない

ʔarigaja naiθ あれがは 出来る

ʔaminuja ɸujaθ 雨のは 降らない
(が)

ʔinnukwanuja ku:tʃiθ maja:nuja

犬のは かんでも 猫のは
(が) (が)

ku:jaθ

かまん

琉球方言において, 係助詞 jaが融合を起こすことはよくあるが, 辺野喜方言は下記の通りである。

habija ne:nna 紙は ないか

ʔu:bija ne:nna 帯は ないか

ka:gija surahaθ 容貌は 美しい

ɸurija jambe: これは 良い気持だ

kikibija 帯は

namaja naja \emptyset 今は 出来ない

subaja jama \emptyset 舌は 痛くない

kimuja sika \emptyset 肝は 好かない

kumuja ne: \emptyset 雲は ない

takiφuruja ?aifiga 大程は あるが

φuija .?uφikun ne: \emptyset

声は 大きくも 無い

taija φuba 二人は 来い

?anaga:ja ra:ga 井戸は どこか

do:ja ra:ga 門は どこか

ru:ja nagaha \emptyset 尾は 長い

ki \emptyset ja ne: \emptyset 着物は ない

那覇方言等では ja の結合する直前の形式の
末尾音が i, a, u, N の場合は融合を起こ
すし、二重母音の場合もそういう傾向があるが、
辺野喜方言の場合は、長音なども含めて総て融
合しないのが普通である。

II, 4, N<も>

(a), 事情の類似した事柄を暗示する

ta:ta:ja su:u figutuni ?ira \emptyset

父さんは 今日も 仕事に 行った

sufi juti tφiburu \emptyset φagiti

歳 とって 頭も 禿げて

(b), 事情の類似した事物の提示

φibuin tφiburu nato: \emptyset

冬瓜も 夕顔も なっている

?irin simui ?ikantin simusa

行ってもよいし 行かなくてもよい

tφiburu jamui wata \emptyset jamui ka:n

頭も 痛いし 腹も痛いし どうにも

naja \emptyset

ならぬ

?innukwam maja:n tφikanato: \emptyset

犬も 猫も 飼っている

(c), 事情の類似したものを繰り返して強
調する。

kwa:ti \emptyset kwa:ti \emptyset sara: \emptyset

食っても 食っても 足りない

mo:kitjim mo:kitjin tφike:gunanu

儲けても 儲けても 使う者が

manri φufigaja \emptyset

多くて たまらない

ki \emptyset he:tji \emptyset he:tji \emptyset jugutji φufi-

着物 替えても 替えても 汚して たまら

gaja \emptyset

ない

φunu ja:u ?anu ja:u ?attji ?a-

この 家も あの 家も 歩いて 遊

φirakku \emptyset

んで歩く

(d), 極端な場合を提示する。〈～さえも〉
ほどの意。

ja:n nagasuru ?uφu ?ami jata \emptyset

家も 流らす 大 雨 であった

?atiha \emptyset ?aibaja hadgin ne: \emptyset

暑さも あれば 風も ない

φaisu:φu sagutu susuinim makiti

走り勝負 したから 年寄にも 負けて

hakufin ne:ntji \emptyset ?ainna

書くの も ないとて あるか

nitto:tin ?atija ?ai suru

寝ていても あては ありぞする

ro:u ?irira \emptyset ja:magai si

門も 出ずに 家にこもっている

dzi:u hatji \emptyset jumibu:ha \emptyset

字も 書いても 読めない

(e), 疑問語に關係して全面肯定・全面否定を表す。

ʔikusanu kutuja sarugaʔ wahaisuru
戦の ことは 誰がも 分かる
kajasufija kassa je:tiʔ ʔaissa
貸らすのは いくらでも あるよ
ra:ʔui sume:taʃiga ra:niʔ ʔa:-
方方 探したが 何処にも 居なか
ntassa:

ったよ

ja:nija saruʔ ʔa:ntaʔ
家には 誰も 居なかった

(f), 主格の ga, nu について全面否定に係わる。

ʔuragan nainna お前がも 出来るか
sarugan najaʔ 誰がも 出来ない
kusanuʔ kwa:inna 草のも 食えるか
(が)
ʔa:nuʔ jamunna 齒のも 痛いか
(が)

前接の形式の末尾音がNの場合、係助詞Nが結合すると次のように変化する。

dʒi < 金 > + n → dʒinuʔ
ʔikkiʔ < 一斤 > + n → ʔikkinuʔ
waʔ < 私 > + n → { wanuʔ
wannuʔ

II, 5, to:ʔ, tuʔ < さえ (も) >

ある事象を普通でないこととして例示し、普通であることを暗示する。

ʔunaguto:n naimunnu ʔuʔganu na-
女さえ 出来るのに 男が 出来
jantʃiʔ ʔainna

ないとて あるか

ʔunagunutun nainumuʔ ʔuʔganu na-
女がさえ 出来るのに 男が 出来
janunri ʔainna

ないとて あるか

ʔuragato:n nairumunnu waga na-
お前がさえ 出来るのに 私が 出
janritʃiʔ ʔainna

来ぬとて あるか

hakufito:n ne:nna
書くのさえ ないか

ʔikkimbe:to:n nuʔuti ne:nna
一斤ばかりさえ 残って ないか

II, 6, ruʔ < 強調 >

ʔuriruʔ ʔuʔkafi:ne: sugui kuru-
それをこそ 動かすと たたかれ

hainro:

るぞ

ʔittʃi ʔuifi mi:ruʔ sabaja ʔe:ri
入って来るの見こそしたら合図しなさい
ʃijo:

よ

III, 副助詞

III, 1, be: < ばかり >

(a), 事象が頻繁であること。< しょっちゅう。いつも > のような意味。

nibutube:ru ʔiri:ru

根太ばかりぞ 出ている

ʔittʃi: ʔʃa:be:ru nuro:ru

しょっちゅう 茶ばかりぞ 飲んでいる

ʔaʃiribe: ʔuinija ʔurimun nainro:

遊んでばかり居ると 馬鹿 なるぞ

ru:nu numufibe: ʔittʃika: tunu

自分の飲むのばかり 入れてから 人の
muŋja ʔi:raŋgi:na

物は 入れないのか

nabe:ra:be: kʷa:hatto:ŋ

糸瓜ばかり 食べさせられている

jamumbe:ru kʷa:to:ru

いもばかりぞ 食べている

ʔasanibe:ʃi 朝寝ばかり して

(b), 当該のことに限定。〈～だけ〉のよ
うな意味。

janamumbe:ru nuʔuto:ru

悪い物ばかりぞ 残っている

ʔumabe: ʔajaŋgi: ʔuri:me:n to:-

ここばかりでなく 君らの所も 来てい

tina

たか

ʔarin tuibe: nuʔuti ja:nu baŋ

あれ 一人だけ残って 家の 番

ʃimi:nuba:na

させるのか

(c), 数を表す語について, 大体の分量・
程度を表す。

sambakkibe: kahairu gwa: je:-

三百斤ぐらい かかる 豚 だった

tanri:banna

そうな

sufiŋ gundzu:be: naitanri ʔi:-

歳も 五十ぐらい なったと いう

banna

よ

jutaibe: ja:taŋ 四人ぐらい だった

suhabe: ʔuito:ke: 十日ぐらい 居とけ

ʔikkimbe: ne:nna 一斤ぐらい ないか

ʔatu kassabe nuʔuto:ŋga

あと どのくらい 残っているか

Ⅲ, 2, nt^(c)a:na: · tt'a:na:, ga:-
re(:)

(a), 動作・事柄の到達点を表す

ʔi:bi:ja godʒi {nta:na:} ru so:ru
{ga:re:}

いつもは 五時までぞ している

ʔata:{nta:na:} ja matto:ti kʷa:-
{ga:re:}

明日 まで は 待って く

iriba

れ

ʔiti {nta:na:} matto:tiŋ ʔa:ŋ
{ga:re:}

いつまで 待っても 来ない

(b), 極端な場合をあげて強調し, 他の場
合を暗示する。

miti ʔatta:kufiga:reŋ ʔu:titti

道 歩く者までも 追って来て

ʔurufi: subanna

殴るそうだよ

(c), 程度の極端な場合

ʔuttuniga:re: ʔuruhainnaʒa:

弟にまで 殴られるかヒャー

ʔikusaju:nija ʔikana nu:ga:re:ŋ

戦世には いかな 何までも

kʷa:taŋja:

食ったね

次のような〈～から～まで〉を含む構文の
〈まで〉の部分は, 格助詞のような機能になっ
ている。

Φumaka: ʔama {nta:na:} ʔikuŋ
ga:re:

ここから むこうまで 行く

次の場合も格助詞的なものがいくらか出ているように思える。

ʕitimitika: jo:ne: {nt'a:na:} Φa-
ga:re:

朝から 晩まで 働
tarakuŋ
く

次は nu:ka: nu:ga:re: でくことごとく
のような意味

nu:ka: nu:ga:re:m muttʃi ʔiri
何から 何まで 持って 行って
ne:ŋ
ない

次の ~ba~ tt'a:na: も慣用句的である。

hakiba hakutt'a:na:ru je:ru
書けば 書いたまでぞ である
ʔikiba ʔikut'a:na:ru ja:ru
行けば 行ったまでぞ である

次の tta:na: は体言的である。

gwahasatta:na:ja suramuŋ je:taŋ
若い 時 は 清ら物 であった

(a) の動作・事柄の到達点という場合は、
nta:na:・ga:re: の両形が併用できるが、
(b) (c) の場合は 1 個の形のみである。19
79 年の調査のとき、当時 47 歳の女性からくまで
の意で ga:ge: という形を得たが、明治生まれ
の 7 氏からは得られなかった。辺野喜の隣部
落の佐手では ʕintuna {nt'a:na:} ʔikiŋ
〈辺土名まで行く〉というから、そちらの影響

を受けた形かもしれない。

Ⅲ, 3, na:・nna:

(a), 数や分量を表す語について、等量の
事物が配分されることを示す。

ʔikutina: ʔat'aiŋga, mi:tina:
幾つずつ 当たるか 三つずつ
ʔataiŋ
当たる
mi:tibenna:ja ʔataihanni
三つばかりずつは 当たるだろう

(b), ある動作が等量の動作として反復さ
れることを表す。

kassanna: hatami:nija ʔutainro:
沢山ずつ 担うと 疲れるぞ
ʔiʕiŋkwa:na: mutti ʔike:
少しずつ 持って 行け
ʔiʕina:ja haŋge:ti {sa:fiba
sa:je:
少しずつは 考えて くれ

Ⅲ, 4, ʔatai <くらい>

(a), 例示されたことについて、その動作
や状態の程度を示す。

taro:atai ʕatarakufija ʕa:nsa:
太郎くらい 働くのは いないよ
sa:suru ʔataija naissa
取らす くらいは 出来るよ
ʕi:ni nubuiru ʔataija naissa
木に 登る くらいは 出来るよ

(b), 提示されたことについて、類似する
ことの中から極端なことを示す。

ʔikana ʕurito:tiŋ ʔujanuʔatai
いかな 馬鹿でも 親のくらい

gwahajannu tu:θ φuinna

分からない 人も いるか

?ikana ?uito:tiθ ja:nu?atai gw-

いかな 酔っていても 家のくらい 分か
ahaihanni
るだろう

Ⅲ, 5, nre: 〈など〉

(a), 漠然と表現する

t'a:nre: nume: 茶など 飲め

t'abakunre: φuke: 煙草など 吹け
(すえ)

?ariganre: ka:fin saθjo:

あれがなど どうしても しないよ

nu:gana k'wa:ifinre: ne:θka:ja:

何か 食うのなど ないかね

k'we:nre: hatamiti ?ikufiga ra:-

鯉など 担いで 行くが 何処

gatiga

へか

(b), 強調

taro:nre: φurufi:nija saraja nu-

太郎をこそ 殴ると ただは

ga:jahanro:

許さんぞ

sakinre: ruku numi:ne: ramasu-

酒をこそ ひどく 飲むと 大変だ

nro:

ぞ

前接の形式の末尾音がNの場合, nre: が結
合すると次のようになる。

dʒiθ 〈 銭 〉 + nre: → dʒinunre:

gwaθ 〈 私 〉 + nre: → gwanre:

N, 終助詞

N, 1, ja:ja:

(a), 同意を求める

naθkwabe: ?ajaθ, tʃiburun nato:-

南瓜ばかりでなく, 夕顔もなってるって

nrija

ね

(b), 軽い疑問

?i:gaiφaije: so:figa ?o:je:nu

言い争っているが 喧嘩

sannaga ?airaja:na:

しないか ね もう

N, 2, te:te:

推量。~だろうよ。~よ

ju:tʃiga mi:ja ?ainte

四つの 一杯は あるだろうよ

?uraga je:nte: お前が してあるよ

N, 3, sa:·ssa:

肯定判断。よ。ね

tʃi: ?irito:sa: 血が 出ているよ

ʧi:nu muito:sa: 毛が はえているよ

ra:ni hakkwate:ra mi:jansa:

どこに 隠してあるか 見えないよ

sume:jajansa: 探されないよ

ʧi:nu ?uφuha muito:ssa:

木が 沢山 生えているよ

ju:nu ?uiro:ssa: 魚が 泳いでいるよ

?amaka: tʃunu φuiθgutu ?ai:ssa:

向こうから 人が 来るごと あるよ

φunu kwa:ja ?ujani nito:ssa:

この 子は 親に 似ているよ

N, 4, nni <念押し>

gunitʃifija naihanni

五日では 出来るだろうね

N, 5, ro: <強意。ぞ。よ>

ɸurinre: ʔuθkafi:ne: sugui ku-
これなど 動かすと なぐられる

ruhainro:

ぞ

ʔamma:ga ʔiru:nri ʔitanro:

母さんが 行って来いと 言っていたよ

ja:ni ɸuinro: 家に いるよ

N, 6, na: <軽い感嘆。ね。よ>

ɸunu warabija ɸuʃi magatʃi tu-
この 子供は 腰 曲がって 年

suiθguturu ʔaimunna:

寄りの ようだね

maru ɸitti:ja ɸataraki ju:ha-
一日中は 働けないよ

nsa:na:

ね

gwahajansa:na: 分からないよ

sannaga ʔairaja:na: しないかね

kinu:nu ne:nu ʔuturuha:taʃijo:-
昨日の 地震の 恐ろしかったこと

na:

よ

終助詞 sa:, ja:, jo: などにくつつく na:
は沖縄の共通語で<～サモー, ~ヨネー>と訳
される。陳述の重なったこの微妙な部分は共通
語に訳しにくいところである。

N, 7, jo: <念押し>

ʔittʃi ɸuine: ʔe:rifiʃjo:

入って来たら 合図しなさいね

N, 8, gi:na <問いただし>

ru:nu numufibe: ʔittika: tunu
自分の 飲むのばかり 入れてから

muθja ʔi:raθgi:na

人の物は 入れないんだね

N, 9, re: <強調>

ɸe:ku ni:rigiha je:ʃiga nama
早く 煮えそうだが まだ

ni:ranre:

煮えないよ

N, 10, ka: <軽い疑問>

wa: muθ je:ka: 私の物 であるかな

N, 11, kaja(:) <軽い疑問>

dʒi: hato:kaja 字 書いているかな

taro: je:takaja: 太郎 であったかな

ʔamanu gwarabi je:kaja:

向うの 子供 であるかな

wa: munru je:kaja:

私の 物ぞ であるかな

N, 12, gaja <軽い疑問>

saθga ɸuiθgaja 誰が 来るかね

ʔanu tu:ja ra:nu tu:gaja

あの 人は 何処の 人かね

N, 13, i <尋ね>

ʔaʃiriru ʔuiru: 遊んでぞ いるのか

nakessa:nu munnu ʔo:tiru t'ari:

泣き虫の くせに 喧嘩して来たのか

t'aru: 来たか

上記のように i は音声環境により長音になる。

N, 14, mi 〈疑問〉

?amana:ti ?asibumi 向うで遊ぶか

N, 15, na(:) 〈疑問, 反語〉

habija ne:nna 紙は ないか

?uraga ?ikiu:sunna お前が 行けるか

na0anna:ka:nna: こんなに早くからか

na0kwa nato:nna かぼちゃ なってるか

dginunre: ne:nna 銭など ないか

ta: tutawa0ja numahanna

茶 一椀は 飲まさんか

N, 16, ja 〈疑問〉

da:ja 0intunaja どこは 辺土名か

N, 17, no:ke: 〈禁止〉

?o:je: so:ti0 ?anfiga:re: 0a-

喧嘩していても そんなにまで き

go:ha sanno:ke:

たなさ する

N, 18, nri 〈引用〉

ta:rami:rafi hakanri ?ija0

なんのかのして 早くと 言わない

fitibi ?isugai sunri ?itunahanu

祝い準備 するとて 忙しくて

?ikunri ?itfim mitai ?ikanunri

行くと 言って みたりに 行かぬと

?itfi mitai

言って みたりに

0intunagatinri ?itai, nagugatinri

辺土名へと 言ったり 名護へと

?itai

言ったり

Nで終る形に結合する場合は -N+ Nri → Nri のようになる。

N, 19, fi: 〈断定, 疑問〉

fibuifi: 冬瓜だよ

?aba ?ura ?itfi tagafi:

おや お前 いつ 来たか

呼びかけの〈あのね〉くらいの意味で jo:

jafi: とか ?anu jo:jafi: というが, この fi: も関係あるものであろう。

辺野喜あたりの fi: は他の地域の者が聞くと非常に特徴的に聞こえる。1960年頃に行った与那城村伊計方言にも kitfo:tifi: 〈来ていてね〉, fi: wanna: musuru 〈ね 私達のむしろ〉と関連する形があった。

N, 20, 0a: 〈卑しめる意〉

sa:iba0a: nakuntfi0 ?ainna

触ればヒヤー 泣くとて あるか

?uttuniga:re: 0uruhainna0a:

弟にまで 殴られるかヒヤー

V, 接続機能

共通語の接続助詞「ば」「て」に当たるものは、琉球方言においては前接の活用語に融合してしまう場合が多いから、単語として認定するのは適当でない。語論的には接尾辞とすべきであろうが、構文論の立場からは一定の役割を担うものであるから、調査した文例の関連個所を整理してみる。

V, 1, ba

(a), 〈もし〜すれば〉

ʔuraga ʔikiba naiʃiga

お前が 行けば 出来るが

sume:ba sume:jaiʔ 探せば 探せる

(b), くもし～しなければ

natiʃa ʔaʃi ɸaʃa:ti ʔamijamba

夏は 汗 かいて 浴みないと

kurahajaʔ

暮せぬ

ʔuraga ʔikamba wanuʔ ʔikaʔ

お前が 行かんと 私も 行かん

samba najaʔ しないと いけない

V, 2, baja

(a), くもし～したら, もし～ならば

t'o:ɸunu ʔaibaja ho:tu:ba

豆腐が あったら 買ってこい

ʔuraga ʔidʒi ʃigane: ʃibaja na-

お前が行って 手伝いしたら 出来

ifiga

るが

kwe:buha:rabaja kassa: je:tiʔ

食いたいならば いくらでも

kwe:ba

食え

ʔittʃi ɸuiʃi mi:run sabaja ʔe:-

入ってくるのを見たならば 合図

ri ʃijo:

しなさい

(b), 前の条件が整うと常に後の条件が整う。～すると～になる。

natʃinu ʔuwaibaja ʃiraku naiʔ

夏が 終ると 涼しく なる

(c), 並列または添加。～し。～その上。

ʔatihaʔ ʔaibaja hadʒin ne:ʔ

暑くも あれば 風も ない

V, 3, baʔ <理由。～だから>

mattaranu sura:kubaʔ janri ja-

つばめが 飛んでるから 悪天候にな

ssa:

るよ

V, 4, ʃiga

(a), ~だけれども

ʔubuha:ʃiga muttit'aʔ

重いけれども 持って来た

kwe:buha:taʃiga kwe:nna:taʔ

食べたかったが 食べなかった

ɸe:ku ni:rigiha je:ʃiga nama

早く 煮えそう だが まだ

ni:ranre:

煮えないよ

hanaja sakuʃiga warabintanu tu-

花は 咲くが 子供らが 取っ

tti nuɸujaʔ

て 残らない

sa:sufija naiʃiga ʔuiʃija ne:ʔ

やるのは あるが 売るのは ない

ʃima dʒima muru migutaʃiga ɸujan

村 村 全部 廻ったが みえな

na:taʔ

かった

(b), 原因・理由

ʔi:ga:ɸaije: so:ʃiga ʔo:je:nu

言い争いしているが 喧嘩

sannaga ʔairaja:na:

しない だろうか

(c), 並列または添加

ʔuɸiha: aʃiga ʔiruja su:haʔ

大きさはあるが 色は 白い

ɸi:hamaki je:ʃiga ʔatʃihamakiʔ

寒さ負け であるが 暑さ負けも

jeʔ

である

V, 5, gi: < 並列または対比的 >

ɸumabe: ʔajaʔgi: ʔuri:me:n

ここばかりでなく 君らの所にも来てた

to:tina

か

V, 6, gitʃi < 動作の継続 >

ʔanu jamaʔ ɸunu jamaʔ ʔakkagitʃi

あの 山も この 山も 歩いて

ʔaʃirakkuʔ

遊んで歩く

V, 7, gutu

(a), 理由。～だから

ɸi:dʒa:ja kusahagutu wa:ja ma-

山羊は 臭いから 豚は まし

ʃija:

だよ

(b), 逆接の確定条件

ɸaisu:ɸu sagutu susuinim makiti

走り勝負したら 年寄りにも負けて

(c), ~する以上は

ʔariga sugutu re:ri

あれが するから 大変だぞ

V, 8, ka: < 不満な気持を表す >

ru:nu numuʃibe: ʔittika: tunu

自分の飲むのばかり入れてからに 人の

muʔja ʔi:raʔgi:na

物は 入れないでね

V, 9, muʔ < 確定の逆接条件 >

ʔunagunu sainumuʔ ʔuʔganu saja-

女が 出来るのに 男が 出来な

nunriʔ ʔainna

いといって あるか

V, 10, munnu < 確定の逆接条件 >

ʔunaguto:n naimunnu ʔuʔganu na-

女さえ 出来るのに 男が 出来な

jantʃiʔ ʔainna

いといっても あるか

wahato:rumunnu ʔaʔ ʔi:ga

分かっているのに そう いうか

V, 11, ne:・nija < 前の条件が整うと
常に後の条件が整う。～すると >

natʃinu ʔuwaine: ʃiraku naiʔ

夏が 終ると 涼しく なる

kassanna: hatami:nija ʔutainro:

沢山ずつ かつぐと 疲れるぞ

sakinre: ruku numi:ne: ramasu-

酒など ひどく 飲むと 大変

nro:

だぞ

ʃirani ʃirainija tʃiburu jamuʔ

太陽に 照らされると 頭 痛くなる

次に、辺野喜方言が他の方言に比べ特徴的と思われる音韻対応を取り上げる。右の()内は那覇方言の例である。

1. 「わ」行音

1, 1, w → gw

gwa: <我> (wa:)

gwaŋ <我> (waŋ)

gwata <腹> (wata)

gwati <割って> (wati)

gwahasa <若さ> (wakasa)

gwahajaŋ <分からん> (wakaraŋ)

gwaha <宇嘉部落。宇嘉の人達は自分の部落を waha という>

ʔagwa <粟> (ʔawa)

tagwaŋ <茶碗> (tʃawaŋ)

1, 2, ʔw → gw

沖縄南部方言などの ʔw が gw に対応する。

gwa: <豚> (ʔwa:)

ʔaʔa:gwa: <母豚> (ʔaʔa:ʔwa:)

u:gwa: <雄豚>

sanigwa: <種豚>

gwaŋkwa <豚小=小豚のこと>

gwa:tʃiki <天気> (ʔwa:tʃitʃi)

gwe:ku <櫛> (ʔwe:ku)

gwentu <ねずみ> (ʔwentʃu)

1, 3, w → b

bi:ba <坐れ> (ire: <wire: >)

-bu:haŋ <～することが出来ない意の接尾辞> (-wu:saŋ)

1, 4, w → ɸ

ɸa:ŋ <居らぬ> (wuraŋ)

1, 5, w → ʔu

ʔu:ki <桶> (wu:ki)

ʔunu <斧> (wu:ŋ)

ʔutti <一昨日> (wutti:)

ʔu:ʔmma <雄馬> (wu:<雄>)

2. 「た」行音

2, 1, ta → sa

sa: <田> (ta:)

saki <丈> (taki)

sagu <担桶> (ta:gu)

satto:taŋ <立っていた> (tattʃo:taŋ)

sanage: <えび> (首里で tanage: という)

sahasaŋ <高い> (takasaŋ)

sabaku <煙草(古語)> (tabaku)

saɸu <蛸> (taku)

samuŋ <薪> (tamuŋ)

sara <只> (tara)

sara:ŋ <足らぬ> (tara:ŋ)

saru <誰> (ta:)

ʃe:ɸu <台風。口蓋化と母音融合の結果 tai が ʃe: になったもの> (te:ɸu:)

so:bi:ra: <ごきぶり。so: はタウ「唐」に当たる>

2, 2, to → su

su: <十> (tu:)

su:hanu <遠くて> (tu:sanu)

sui <鳥> (tui)

suiŋkwa <小鳥> (tuigwa:)

sukei <十回> (tuke:ŋ)

suha <十日> (tuka)

sufi <歳> (tufi)

susui <年寄> (tusui)

sutente: <取ったはずよ> (tutte:nte:)

- sunai <隣> (tunai)
 sume:jajaŋ <捜せぬ> (tume:raraŋ)
 sa:fe: <取らせ> (turafe:)
- 2, 3, te → fi
 fi: <手> (ti:)
 fira <太陽> (ti:ra)
 firainija <照らされると> (tirasari:-ne:)
 finto: <天> (tinto:)
- 2, 4, tsu → tʃi, tʃi, tʃi
 tʃiki <月> (tʃitʃi)
 tʃiŋ <角> (tʃinu)
 tʃimi <爪> (tʃimi)
 tʃimi <爪>
 tʃiburu <頭> (tʃiburu)
- 2, 5
 -sa: <複数の意の接尾語> (-tʃa:)
- 3, 「か」行音
 3, 1, ka → ha
 hakudʒi <顎> (kakudʒi)
 hata <肩> (kata)
 hama <鎌>
 haradʒi <髪> (karadʒi)
 hari <風> (kadʒi)
 sahasanu <高く> (takasanu)
 ɸaraha <裸> (haraka)
 junaha <夜中> (junaka)
 ho:ri <麴> (ko:dʒi)
 ho:jajaŋ <買えぬ> (ko:raraŋ)
 上二つの ho:は「かう」に当たる所である。
- 3, 2, ki → ɕi:
 ɕi: <木> (ki:)
- 3, 3, ke → ɕi:, ɕi
 ɕi: <毛> (ki:)
 ɕibufi <煙> (kibufi)
- 3, 4, ko → ɸu
 ɸui <声> (kwi:)
 ɸuri <これ> (kuri)
 ɸumba <こむら> (kunra)
 ɸugufimi <甲いか> (kubufimi)
 saɸui <せき>の ɸuも「こ」に当たるか
- 3, 5, ki → ki, k'i
 kimu <肝> (tʃimu)
 k'inu: <昨日> (tʃinu:)
- 3, 6, ku → ku, k'u
 kutʃi <口> (kutʃi)
 k'ubi <首> (kubi)
 kumu <雲> (kumu)
 ʔakubi <あくび> (ʔakubi)
- 3, 7
 su: <今日> (tʃu:)
 suramuŋ <清ら者> (tʃuramuŋ)
 surahaŋ <美しい> (tʃurasaŋ)
- ダ行音のラ行音化が目立つが、これはよくあることである。が、
 hari <風> (kadʒi)
 ha:ri <数> (ka:dʒi)
 ʔe:ru: <仲間> (ʔe:dʒu)

のように有声破擦音が r 音になるというのは珍しい。

始めに触れたように、この調査は明治生まれの男3人、女4人の方から行った。現在の歳は70代が5人、80代が2人である。もっとも若い方が72歳で、あとは80代前後の方である。話者としての経歴も、お聞きするところによれば、申し分のない立派な方方であった。にもかかわらず、男性の場合と女性の場合とでは、異なる面がみられた。明治40年生まれ of 男性の話者が〈私〉を waʔ と言ったとき、gwaʔ とは言いませんかと尋ねると「人によって gwaʔ という人もいる」ということだった。w→gw, t→s, d→r などのような音韻現象のみでなく、代名詞 ʔura〈お前〉を ja: といたり、方向の助詞 gati を gatʃi といたりするなど、いろいろな面で男と女では異なるようだった。恐らく、男性が家や部落を代表して、対外的に接する機会が多く、独自のものに対して、役場の所在地の方言、即ちより中央的なものにしようという意図が無意識のうちに働いて来たせいだと思われる。多分、あまり他部落に行かない、ひっこみ思案な80代前後の老女の言葉の方が、より古い辺野喜方言なのであろうが、さりとて男性の言葉は訛ってだめだとも決めつけられないだろう。多かれ少なかれ、どの地域でもある現象と思われる。ここでは、総てそのままの形で扱った。最低、20歳くらいまで辺野喜で過した人は、辺野喜方言の話し手としたことになる。

次の語彙は、調査のときノートの端に書き留めておいたものなどである。

あ

ʔa:sa あおさ

ʔasani 朝寝
ʔaʃʃi: 朝飯
ʃimme: 昼飯
juʔui 夕飯
ʔaba (感嘆詞)。ʔaba ruku ʔu-
raja ʔuʔumunu ʔi: ʃʃi
〈アバ ひどくお前は太もの言い
して〉などと用いる。類するもの
に muna: というものもある。

ʔatabika: 蛙
ʔo:ʔatabika 青い蛙
ʔanaga: 井戸
ʔamamu やどかり
ʔi:busagatti: 言いたいほうだい
ʔika: 鳥賊
ʔikimabuni きびなごを生けておく船
ʔitiku いとこ
ʔitikuna: いとこ達
ʔitiku ninru いとこ達
ʔino: 磯湖・岸近くの海
ʔibi えび
ʔiʔkagiti mo:iba 召し上がっていらっ
しゃい
ʔinnukwa 犬。犬の子ではない
ʔu: 苧
ʔuifija ne:ʔ 売るのは ない
ʔuiburi:ʔ 酔い痴れる
ʔuittu 酔い人。酔っぱらい
ʔusa: 定盛さんの童名
ʔussana: nato:ru こんなに沢山 な
っている
ʔunikiga: 辺野喜川
ʔunikinu ʔutuba 辺野喜の言葉
ʔuniʔga: 辺野喜川の上流
ʔumi 海

ʔura お前。君
 ʔuranre: お前など。君など。(卑)
 ʔuri ninru お前達人数。お前達
 ʔuruta:kuʔ 踊っている
 ʔe:ru: 友達
 ʔe:ru: ninru 友達人数。友達
 ʔo:rama 目白
 か
 ka:ku: ka:ku: 蛙の鳴声
 ka:ʃiʔ どうしても
 kagi:kagi: 豚の殺されるときの鳴声
 ʔkamemotoja: 屋号名
 ʔkarai 飾り
 kaʔge:iʔ 考える
 kaʔge:to:ru hadʒi 考えているはず
 kaʔge:ti ʔui hadʒi "
 kukukku:ku: 鶏の鳴き声
 kutʃikadʒi 東風
 kura: すずめ
 kurugumu 黒雲
 ʔkwa:hatto:ʔ 食べさせられている
 kwaʔkwa 赤ちゃん
 kwe:iʔ 食べる
 gai 蟹
 garimaʔ ガジマル
 gadʒimaʔ "
 garamu 蚊
 gira ギラさんの童名
 gu:gu: 豚の鳴き声
 guruma: 山いも。甘藷は jamuʔ という
 gwaʔ 私
 gwanna: ninru 私達人数。私達
 gwentu ねずみ。wentu という人もいる。
 gwentugwa: 小ねずみ

さ
 sa:ʃiru suru 取らせぞ する
 sa:suʃija naiʔ 取らすのは 出来る
 sa:mi:kunra 白さぎ?
 sabani サバニ
 sarati 先立って。琉歌やオモロ語には
 あるが、現在的那覇方言等では聞
 かない。伊波普猷が猿田彦神の意
 義を解く鍵にした語である。和泊
 町国頭方言でも sadati という。
 ʃi:guʔkwa 小刀
 sui 首里
 su:gumu 白雲
 su:haka: 遠さから
 sume:iʔ 探す
 sumeigure: ʔajaʔ 探すほどではない
 surati:iʔ 育てる
 suri 袖
 so:ɡwat'i 正月
 so:rimuja: いもり
 た
 ta: 茶。tʃa:という人もいる
 tʃa:raso:iʔ はっきりしないこと
 tʃaʔ 来た
 tarui 来たか。琉歌「行逢たるゑせのぢ
 や行逢たるゑおとぢや」の「たるゑ」
 と同じ結合である。完了のタンの連
 体形「たる」に尋問「ゑ」がついた
 形。現在的那覇方言にはない結合であ
 る。
 taro:ʔgutuja sarugan najansa 太郎
 がごとは 誰がも ならぬよ
 to:kaki 斗檣
 to:bira: ごきぶり。tは新しいものか

darujami 晩酌。dは新しいものか
 ũjiku 鳥の名前

な

na:minre: 貴方など
 nakessa 泣き虫
 nati 夏
 niti 熱
 niŋe: je:bi:taŋ 有難うございました
 nui 苔
 nuri: のど
 nuŋgiri 虹

は

haku ʔuŋi: 早く 起きろ
 hakkui 防風林
 hana 女の童名
 hame:iŋ 探す
 hanro: カマトさんの童名
 he: inso:re: お帰りなさい
 basasurina ほととぎすのことという。
 basasurina basasurinaga
 といって鳴くとのこと。また、
 辺土名では kundʒaŋ kaki-
 taka と鳴くとのこと。
 bitugwentu じゃこうねずみ。那覇方言
 では bi:ʔja: という。gwe-
 ntuはねずみのことだから、
 bituは bi:ʔja: に当たる
 部分であろう。
 be: 山羊の鳴き声
 bo:ri kwa:suŋ 散髪する
 ɸa:ti ʔike: 食って行け
 ɸaiŋ 走る
 ɸatarakikkansa:na: 働けないよもう

ɸana 鼻
 ɸanasaki はしっこ
 ɸanaŋgutu surahaŋ 花の如 美しい
 ɸaŋkahaŋ 恥ずかしい
 ɸi:hanu juɸu:to:ŋ 寒くて休んでいる
 ɸi:ra: 山羊
 ɸiʔi 礁
 ɸirige: 肘
 ɸui 声
 ɸui kikuŋ 声 聞く
 ɸuiŋ 来る
 ɸugufimi 甲いか。こぶしめ
 ɸusu へそ
 ɸunui 苔の一種
 ɸuju: 冬
 ɸe:kuka: 早くから
 ɸo:ta 包丁

ま

mai 尻
 maja: 猫
 maja:gwa: 小猫
 mi:ʔi 三つ
 mitʔi 道
 mimbe: ものもらい
 muri:gi:=me:ʔigi: 箸を作る木
 mo: 牛の鳴き声
 mo:ta:kuŋ 踊って(歩いて)いる
 mo:tui 鳥の名前
 mo: nato:ŋ 草はらになっている
 や・ら・わ
 ja:magai 家曲り。出不精
 ja:ru: やもり
 jama ʔakka: 山歩き。山仕事をする者

jamatubi:ra: ごきぶりの一種

juge:rumai 一泊どまり

jufi:ŋ 教える。琉歌「親のよせごとや
肝に染めれ」の「よせ」と同語で
ある。

ra: su:to:ra wahajaŋ どこ 通って
いるか 分からない

ri: 地

ru:guŋiru 鶯。その鳴き声でもある

wa:tʃiki 天気

wakubitʃi 蛙の一種

wassaŋ 悪い

warabi haʃigi:ŋ 子供 おぶる